



アタッカー No.18



来間タロー

チャレンジャー誕生

中学を卒業したばかりの少年少女達が緊張した面持ちで、
高校の入学式に出席している。
いよいよこれから高校生活が始まるのだ。今までの子供社会ではなく、
大人社会への助走が始まろうとしている。

同じ中学からB高校へ入学したのは7人で、
ほとんどがバラバラにクラス分けされた。
そして、長く退屈な入学式が終わり、教室へと移動する。
『1年5組、ここか』

教室では、近隣の生徒間で自己紹介が始まり、
お互いによろしくと言っている。
周りを見渡すと、全員が知らない生徒で、皆他の中学から来ていた。
いや、一人見覚えのある顔があった。
同じ中学だった植部 明美だ。お互い顔と名前は知っているが、
会話したことは無い。
とりあえず、挨拶だけでもしておくか。そう思い、植部に近づく。

『よ、よう植部さん、同じ中学だった石上だよ。
同じクラスだな、よろしく。』
『えっ、アンタ同じ中学だっけ？ ゴメン、知らなかった。』
『……』茫然と立ち尽くす。

次の瞬間、周囲から どっと笑う男子達の声と、
クスクスと笑う女子達の声で盛り上がった。
盛大な笑いから逃げるように自分の席に戻る。

(やっちまった。知らなかったのかよ、びで一な。)
すると、隣の席の男子が声を掛けてきた。

『おい、お前やるな。入学初日にナンパかよ。』
『違うって、あの子は同じ中学の……』
『まあ、いいから、いいから。結果は見事に撃沈したけど、
その勇気だけは尊敬に値する。』
『だから、そうじゃなくて……』

『俺は、岡だ。よろしくなチャレンジャー。』
『ああ、俺は石上。よろしくな、人の話を聞かない岡。』

入学初日から笑われた俺は、自己紹介するまでもなく
『チャレンジャー』として、クラス中に名前を知られた。
まったくもって、心外だ。

恋の予感

入学二日目 朝の教室

俺が教室に入ってからすぐ、岡が入ってきた。

『ウッス』

『よう』

『あ〜、今日から授業が始まるな。かったるい。』

『お前、高校は授業を受けに来る処だろう。』

『言うねえ、チャレンジャー。勉強に自信があるのか？』

『まあな。』

『ほ〜、結構な事だな。お前、部活はやらないのか？』

『ああ、中学でもやってなかったし、特にやりたい部活はないからな。

それに、部活に入ると先輩との上下関係が厳しいだろ。

そういうの苦手なんだよ。岡は、もう決めたのか？』

『俺はバスケ部に入る。小学校の時からやってるしな、バスケが好きなんだよ。』

『そうか、頑張れよ。』

『おう』

退屈な午前中の授業が終り、昼休みになった。

俺と岡は食堂に入り、メニューを見る。

『大した事ないな。さすがは、学食。でも値段は安い。

問題は味だな、美味いかな？』

『お前はグルメ番組のレポーターか？』

岡がボリューム満点の日替わり定食の大盛りを選んだ。

俺は、同じ定食の並み盛りにした。

『むっ、意外と美味しいな。量も多いし、結構やるぞ、この学食。』

『そうだな』

すると、そこへ横から上級生が割り込んできた。

『お前ら、一年生だな。ここは俺たちの場所って決まってるんだ。他へ行け。』

『えっ、そんな決まりがあったんですか？』

『早くどけよ。殴られたいのか？』

『すみません、知りませんでした。今日が初めてなもので。石上、行こうぜ。』

仕方なく、席を立った。周りを見ると、同じように追い出される一年生たちが居る。

どうやら、毎年入学の時期になると見られる恒例の風情らしい。

しばらくの間 周囲を観察して、空席を探す。

そして、一番奥の片隅で冷えた昼食の再開となった。

『くそ、威張りやがって。』

『だな。まあ、仕方ないさ。これが社会の上下関係ってモンだ。』

俺たちも来年、新入生を追い出してやろうぜ。』

『……』

すると、行き場の無さそうな女子3人が隣にやってきた。

『あの、ここ空いてる？いいかな？』

『ああ、いいぜ。お前たちも追い出されたのか？』

『そうなの、他に場所がなくて。あれ、岡君と石上君か。』

『なんだ、同じクラスの植部たちか。』

そんな訳で、同じ痛みを持つクラスメイト達との愚痴大会とも思える昼食が始まったのだが、その中に一人 無言で食べる女子がいた。

『開花さん、さっきから、黙ってるけど、気分悪いの？もしかしてキレてる？』

『そうじゃないけど、もっと他に楽しい話題がないかなって……』

まったく同感だ。せっかくの食事に愚痴ばかりでは美味くない。良く見ると、ショートカットが良く似合う可愛い子だった。ラッキー。

『そうだな。楽しい話題というと、昨日ヒーローが誕生したよな？』

『あ〜、チャレンジャーの事ね。』

そう言って皆が俺の方を見て、ニヤリと笑う。

『なんだよ、その話はやめてくれよ。誤解だって。』

『いや、思春期真っ只中の若者にとって 決して忘れる事はできないネタだ。』

『植部さん、実の処どうなの？石上君とは本当に同じ中学だった？』

『う、うん。どうやら そうみたい。』

『なんだ、面白くねー。このネタはもう使えないじゃん。』

『よし、疑いが晴れてスッキリしたよ。このネタは今日限りで封印すること。』

そうして時間が過ぎて行き、始めは不快だった昼休みも、終る頃には楽しいひと時となった。特に、開花さんと会話ができたのは思わぬ収穫だ。今日はツイてるぞ。

放課後、帰宅する者や部活の見学に行く者、友人と話をしたりして暇潰しをする者が居る。帰ろうとする俺に、岡が話しかけてきた。

『石上、部活見学行かないのか？』

『ああ、部活に興味無いし、帰るよ。』

『そうだったな。』

そこへ、意外にも開花さんが混ざってきた。

『あら、石上君は部活やんないの？』

『まあね。開花さんは、何部に入るかもう決めたのかい？』

『うん、私はバレエ部に入る。子供の時からずっとやってきたし、面白いよ。』

『へー。』

『石上も何か始めればいいのかによ、高校から始めるケースもよくあるぜ。』

『チャレンジャーなのに部活には挑戦しないの？』

『そ、その呼び方は、やめたまえ。』引き攣る顔で注意する。

『開花さん、そろそろ見学行こうよ。時間だよ。』

『うん。』『じゃね、バイバイ。』

『おう、バイバイ。』

今まで、女子からはまったく相手にされなかったのに。

開花さんと会話が出来た上、バイバイか。いいな～、高校生活って。

思わずニヤける。

『石上、お前、開花に惚れたな。』

ドキッ

『うっ、何を言い出すんだ。言いがかりは止せ。』

『真っ赤な顔で否定しても、説得力が無いぞ。』

『お前、この話をネタにしてまた俺をからかう気だろ。』

『いや。俺は部活でも恋愛でも真剣に立ち向かう奴をからかったりしない。』

『岡、お前 意外といい奴だな。』

『おう、そこんところ、よ～～く覚えておきたまえ。』

初夏の頃

5月下旬になり、一年生は高校生活にも慣れてきて、友達も増えてきます。

部活を始めた者は、毎日厳しい練習に耐えて頑張っています。

そんな中、部活はおろか、アルバイトもしない、彼女もない、暇だけは十分ある自分に何か煮え切れないものを感じるようになりました。これで良いのだろうか？

今朝もトボトボと教室に向かっていると、

幼馴染の中本が声を掛けてきた。

中本とは家が近所で小学校からの付き合いになる。

『よう、石上。しばらくだな。』

『おう、久しぶり。元気か？』

『いやー、部活の練習が厳しくてな、付いていくのが精一杯だよ。』

『この高校のサッカー部は強いからな、半端な練習じゃないだろうな。考えただけでゾっとするよ。』

『お前は部活やってなくて、毎日なにやってんだ？暇じゃないか？』

『暇じゃないよ。やることはあるぜ。』

『家でゲームやったり、TV観たり、エッチな雑誌読んだり……』

『探るな！』大方当たってるので、反論出来ない自分が悔しい。

『やはり、そんな暮らしで楽しいか？もっと青春しようぜ。』

部活とか恋愛とかアルバイトして何か買うとか。二度と味わえないぞ、この高校生活は。』

『何だそれ。おっさんみたいな事を言うじゃねえか。』しかし、正論だ。ムカつく。

『何も良い事だけが青春じゃない。辛い涙も青春だぞ。』

『む、さてはハートブレイクだな。』

『そうだ。見事に木端微塵となったよ。でも、悔いは無い。』

『本当かあ？』

『ああ、こればかりはどうしようもないし、クヨクヨしても仕方がない。また、次の恋に期待だな。』

『青春してるねー。羨ましいよ。』

『お前はまだ坊やだから、理解できねえだろうな。』

『む、で、誰なんだよ、相手は？』

『お前のクラスに開花って子が居るだろ？』ドキッ 急に心拍数が跳ね上がる。

『お、おお、い、居るな。』

『その子だよ。何しろ、明朗活発で可愛い、人当たりも良くて友人も多い。』

『完璧だな。さぞ人気があるだろう。』

『ああ、噂では学年人気No1らしい。』

『お前、随分高望したな。そりゃ、無理だろう。』

『高嶺の花だとは思ってたよ。でもな、ずっと、胸の内に秘めておくより、いっそドカンと吐き出して、』

撃沈した方がスッキリするんだよ。判んねーかな？』

『男として尊敬するよ。』悔しいが、今の自分には出来ない。

『失恋もな、初めての時はショックで死にたい位だったけど、何度も繰り返すと怖くなくなるぞ。

大体、失恋が怖くて恋ができるかっての。』

『おっしゃる通りです。』くっ、自分が情けない

恋のスタイル

7月になり決まって出てくる話題は、もうすぐ夏休み。

夏休みになる前に恋人を作るか、夏休み中に恋人を作るか、意見が分かれるようですが、同じ学校で恋人を作るなら、前者。そうでないなら後者のケースが多い様です。

ところで、根性無しの俺は、学年最高峰の花に手を出す勇気はない。せっかく、クラスメイトという都合の良いポジションにあり、ソコソコ仲良く会話も出来ている。苦労して告白し、秒殺されて、今後会話が出来なくなるくらいならこのままの方が……しかし、本当に それで良いのか？

一学期最後の日 教室

岡 『やっと、今日で授業が終わりだな。いやー、長かった そして辛かった。』

石上 『明日からは待望の夏休み。』

岡 『そうだな。一か月以上も君の顔を見れないなんて残念すぎるよ。』

そう言って、岡は開花の方を不敵な笑いで見る。

開花 『あらー、私もあなたに会えないのは寂しいわ。眠れない夜が続きそう。』

開花も不敵な笑いで返す。

石上 『しらじらしい。気持ち悪いから他でやってくれ。』

植部 『あれー、石上 ヤキモチ？可愛いトコあるのね。』

と一番不敵な笑いをする。

開花 『まあ、嬉しい。私にヤキモチ焼いてくれるの？石上く～ん。』

とウィンクしてくる。

石上 『お前ら、この暑さで頭イカれたんじゃないのか？』

岡 『その通り、通知表を見た瞬間に脳がぶっ飛んだ。』

植部、開花 『どひゅーん。』

入学して3カ月が経ち、こういう くだらない会話がごく自然にできる程 仲がよくなった。

この中では皆 異性とは思っていないのかも知れない。

お互い名前を呼び捨ててで呼んでいる。

植部 『ところで、岡は彼女できた？』

岡 『いや、俺は硬派だからな。バスケが恋人さ。』

大きく胸を張って自慢する。

開花 『へー。イマドキ硬派ね～。』不敵な笑いをする。

岡 『何だよ、開花こそ 彼氏がいなくせに 告白してくる男どもを

次から次へとバッサリと切り捨ててるじゃんか。』

開花 『よく知ってるわね。誰から聞いたのよ！！』大声になる。

植部 『なにしろ学年人気No1だそうで、そりゃ一噂にもなるわよ。』
なんて厭味な言い方。

石上 『うむ。散っていった野郎どもは、それはそれは見事な最期だった。』

開花 『うっささいわね！私をバレーより熱くさせる男が居ないだけよ！！』硬派だ。

岡 『他人の事より植部はどうなんだ？彼氏はいるのか？』

植部 『……』

石上 『いやー、照れるな。』と、ボケてみると。

ドカッ 植部の素早い蹴りが俺の脛に入った。

石上 『痛っ～ ジョークだろうが！』

植部 『アンタたちのような坊やには、乙女心が判らないわよ。』

岡 『たちって、何だよ 石上なんかと一緒にすんなよ。』

植部、開花 『一緒だつーの。』

石上 『岡、光栄に思えよ。』

岡 『ショックで熱がでそうだ。』

岡は、バスケットボール部でインターハイ出場を目指し、
日夜練習に励んでいるので、恋愛をするつもりはないらしい。
結構、人気があるのもったいない。

開花は、理想が高らしく 恋人ができないようだ。妥協はしたくないらしい。

植部は、どうやら好きな男子がいるみたいだが、進展はしていない様子。

皆、思春期真っ只中。それぞれの恋愛観があるようだ。

そして、それぞれの夏休みが始まった。

ナビゲーター

夏休み 学校では熱心な部活や成績の悪かった生徒の補習があり、少人数だが人は居る。岡も開花も部は違うが、それぞれの部で頑張っていた。そんな日下がり、開花とはクラスは違うが同じバレー部の岩田京子が開花陽子と弁当を食べていた。

『陽子、この調子じゃレギュラー取れそうね。』
『どうかな。もちろん狙ってはいるけど、先輩たちも必死だし、そう簡単には…』

『絶対大丈夫よ。陽子は、一年の中じゃズバ抜けてるし、中学大会でも良いトコまで行ったんでしょ。秋には一年生レギュラー誕生ね。』
『うん、サンキュー。頑張るよ、京子も頑張ринаよ。』

『私は無理。練習に付いていくのが辛くて、それに陽子みたいにセンス良くないし。』
『ちょっと、どうしたのよ、京子らしくない！アンタ最近 元気無いよ。』

『…』少し頬を赤くする。
『むむ、その表情。さては、恋に落ちたな。』

『かもね…』
『うわーっ、裏切ったな。私たち、恋をしない掟でしょ。あー、これで友達一人減った。』

『だって…』
『何が だってよ、いつの間にそんな女の子らしくなった訳？油断も隙もありゃしない。』

『人を好きになることは、自分ではコントロールできないものよ。』
『ふーん。それは、それは。結構なお話で。』慥然とする。

『バレーは好きなんだけど、彼の事を考えると、厳しい練習が辛くて…』
『ムカつくなあ、その女の子らしい仕草。じゃ、部活辞めて、彼とイチャイチャしてなよ。』
そう言いながら、ガツガツと弁当を食べる。

『それができれば悩まないよ。』ほとんど弁当を食べない。
『何で？色気出して、今のように乙女らしい仕草で迫れば…』
自信たっぷりに言う。

『私、陽子みたいに可愛くないし。』
『そんなもん、男の好みでしょうが。京子の彼が、京子の事を可愛いと思えば、京子は可愛いだよ。』

『そうかな？…』
『そうに決まってる！で、一体誰よ、京子をここまで乙女にした野郎は？』

『サッカー一部の…』頬が真っ赤になる。
『サッカー一部の？』イライラしている。

『……』弁当を箸で突きながら、モジモジしている。

『早く言わないと、京子の弁当まで食べるよ。』

自分の弁当を済ませた陽子は、京子の弁当を箸で威嚇してくる。

『…中本くん…』下を向いたまま、恥ずかしそうに呟く。

『あー、やっぱり。彼カッコいいし、人気あるもんね。それに、一年で既にレギュラー取ったらしいし、ライバル(恋敵)が多そうだね。』妙に納得する。

『うん、最大のライバルは……』じーっと陽子を見る。

『何よ?』少し焦ってくる。ドキドキ。

『中本君は、以前、陽子に告白したんだよね。』鋭い目が変わる。

『……そ、そうだった?』ドッキ、ドッキ、ドッキ、ドッキ…

『隠したって無駄。皆知ってるよ。陽子が彼を振った事も。』

『……』顔面硬直、心臓バクバク。

『私と同じクラスの子がこの前 中本君に告白したら、好きな人がいますって断られた。』

『それが私とどういう……』

『関係大アリでしょ。中本くんは、まだ陽子の事が好きなんだから。』

『でも……』

『ウン。判ってるよ。陽子は悪くないし、陽子にはどうしようもないってことも。

彼が陽子を好きな事も どうする事もできない。』

ポトリと京子の涙が弁当に落ちた。

バレエ部の先輩 『よーし、昼休みは終わりだ! 午後も気合入れて行くぞ!!』

京子、陽子 『ハイ!』

『京子、くじけないで 頑張ろう。』

『うん。』

午後になると、俺は夏休み恒例の花壇への水まき当番として登校してきた。

適当に水をまき、小鳥たちに餌をやる。

校舎に囲まれた花壇では、部活中の生徒たちのかけ声や楽器の音が聞こえてくる。

体育館では、バレエ部、バスケット部が グランドではサッカー部や

野球部、陸上部が練習している。皆 頑張っているんだな。

俺は、何やってんだろ。溜息がでた。

自分で何を頑張れば良いのかが判らない。部活だと先輩や監督が

色々アドバイスしてくれるが、個人の恋愛にはコーチが居ない。

自分の力で手探りして行くしかないのか。

カーナビのように 俺専用の恋愛ナビゲーターが欲しいものだ。

あー、退屈な夏休みだ。心の中で叫んでみた。

偉大な先輩たち

『水まき終わりました。後、道具は元に戻してます。』

用務員室で用務員に伝えた。

『ハイ、御苦労さん。気を付けて帰りな。』

『ハイ、失礼します。』と帰ろうとしたが、用務員さんが持っている物が気になった。

『何ですか、その手に持っている物は？』

『見～た～な～。』怪しい形相で近寄ってくる。

『えっ、いやその、何か見えたような気がしたんですけど、気のせいでした。』

『そうだろ、そうだろ。君は良い生徒だ。』急に仏のような優しい顔になる。

何だろう、如何わしい物ではなさそうだが、気になる。木製のオモチャのようだ。

そうか、用務員さんは、良い歳をしてオモチャで遊んでいた。

それを生徒に見られたので脅かしてきたという訳か。

それなら、怯える事は無い。どうせ暇だし尋ねてみた。

『それは木のオモチャですね。誰にも言いませんから安心してください。』ニンマリ顔

『馬鹿野郎、そんなじゃねえ！！』また、鬼の形相になった。

『えっ、でもそれは どう見ても木製の……』

『木製には違いないが、オモチャだなんて とんでもねえ！』結構怒っている。

『そんなに怒られるような事、言いましたか？偶然目に入った物を聞いただけなのに。』

『あっ、怒鳴って申し訳ない。しかし、これは見なかった事にしてくれないか？』

『それが何か、簡単に教えてくれたら、忘れますよ。』

『まったく、最近の生徒はしっかりしてやがるな。判ったよ。』

用務員さんから木製のナニを渡してもらい、観察する。

片手に乗る程度のミニチュアサイズで、ピアノのようだ。

『へ～、旨くできてますね。用務員さん、木工細工が趣味なんですか？』

『もう気が済んだろ？』そう言うと、パッと、木製ピアノを奪い返す。

その時、微かに金属音がして、用務員さんは、しまったという顔をした。

『何です、今の音は？』

『何でもいいたろ。見せたんだから、約束通りもう帰ってくれよ。』

『まだ、それが何か説明して貰ってませんが……』

『まったく、しつこいというか、君は暇なのか？』

『はい、暇で暇で 帰っても やる事がありません。』情けない事を自慢した。

『絶対に秘密を守れるか？』怖い顔で迫ってくる。

『約束します。』そんな大げさな物だろうか？

『これはな、ハンドメイドのオルゴールで、世界に たった一つしかない物だ。』

『オンリーワンですか？きっと高いんでしょうね？』

『技術の授業で余った材料を使ったからな、元はタダみたいなものだ。

それに、卒業生が自分で作った物だからあまり綺麗な出来栄ではない。』

『それをそんな秘密にしたり、大事に扱う理由が判らないのですが。』

『コレにはな、卒業生の魂が込んでいるんだよ。』真剣な表情に変わる。

『先輩の大事な思い出なんですか？』

『そうだ。』ふっと、溜息をつき、安心した表情に変わった。

そうか、先輩が自作したオルゴールをきっと卒業記念に
プレゼントされたんだ。それを大事に保管してたって訳か。
良い話じゃないか。何も隠す事ないのに。

『君なら大丈夫そうだから、全部話そうか。』そう言って意味深な顔をする。

『はい、聞きたいです。お願いします。』

『コレはな、数年前 ある先輩が好きな人にプレゼントする為に自作したオルゴールだ。

何度も失敗して作り直して、やっと完成した。でも、残念なことに受け取って貰えなかった。

先輩はコレを捨てようとしたが、捨てるくらいなら此処に置いて行けて事で

現在もこの用務員室にあるって訳だ。』しみじみと語った。

『切ない話ですね。』

『そうだな。こればかりは、どうしようもない。実はコレ1個だけじゃないんだ。』

そう言って、奥の棚からオルゴールを取り出してきた。全部で8個ある。

『歴代の先輩方の作品たちだ。それぞれ個性が出ているだろう？』

『はい、微妙に形が違いますね。』

『人間と同じだよ。似ているようだが、同じものは無い。一つ一つ、微妙に異なる。』

『すると、8人の先輩が自作のプレゼントを受け取って貰えなかった……』

『まあ、そうだな。中には、せっかく何カ月も掛けて魂を込めたのに、渡そうともしない先輩もいた。

理由を聞くと、彼女には既に恋人が居て、その恋人が完全無欠の男だったらしい。

自信を無くした先輩は、敵前逃亡した訳だ。まったく情けない話さ。』

『恋って残酷ですね。』

『でも、受け取って貰えたケースもあったぞ。』得意げに言う目が輝いている。

『で、結果は？』

『う、それは 言えん。』急に視線を反らし、遠くを見る。

『教えて下さいよ。一番大事なところでしょ。』

『で、結果は、まあ 友達でいましょうとか、他に好きな人がいますとか……』

『結局ダメじゃん！効果あるんすか、コレ？』オルゴールを不審そうに見る。

『馬鹿野郎！！コレには何の罪もないだろうが！世の中、絶対ってのは無いんだよ。
大きな夢と希望があるから頑張れるんだ。結果よりも、先輩方の勇気を尊敬すべきだ。』

『ごもつとも』耳の痛い話だ。
結果を恐れて、何もできない自分に比べれば、先輩を笑う資格なんか無い。

『おっと、もうこんな時間か。悪いけど、今日はもう帰らないといけないんだ。』
『あっ、こちらこそ、貴重なお話、ありがとうございました。大変参考になりました。』

『今日の事、判ってるね？くれぐれも……』
『はい、判ってます。口外しません。』

アタック プロジェクト

風呂に入りながら、今日の話を出す。
先輩達は、どんな思いでオルゴールを作ったんだろう？
100% 旨く行くなら、時間と労力を惜しまないが、
そうとも限らない訳で、結果的に無駄な努力をしたにすぎない。
後悔はしなかったろうか？

そう言えば、中本は開花に告白して一刀両断にされながらも、
悔いはないと格好の良い事を言いやがった。
本心からか、単に強がっているだけなのか？ どうなんだろう？ さっぱり判らん。

ベッドに入り、寝ようとするが、目が冴えて眠れない。用務員さんの言葉を思い出す。

『絶対旨く行くと判っているなら、誰も努力なんかしねえよ。僅かでも望みがあるから、勇気を出す訳だ。
問題は、どうやって相手に自分の想いを正確に伝えるかだよ。オルゴールは単なる手段の一つさ。』

ごつい顔に似合わないけど 心に響く良い言葉だ。
よし、俺も男だ。一丁頑張ってみるか。どうせ暇だし。

このまま、貴重な青春時代を終わらせるのは、あまりにも愚かだ。で、何をどうしようか？

翌日、することも無い、行く処も無い。遊びに行く相手も居ない。なぜか、昨日の用務員が気になる。
顔に似合わず、案外親切そうだし、暇だし。そういう訳で、夏休み中の学校へやって来た。

『こんにちは、』
『おう、やはり来たか 暇な生徒。』
『ひどいですよ。事実だけど。』
『そうか、君の名前をしらないものでな。いやスマン。』

『1年5組の 石上といいます。よろしくお願ひします。』
『うん。用務員の森河だ。よろしく。で、今日も花壇の水まきか？』
『いえ、昨日のオルゴールの話の続きを……』
『んなもん、もうねえよ。あれで全部だ。』

『えーっと、じゃ、質問して良いですか？』
『何だ？』

『先輩達がオルゴールを作ろうとしたきっかけは？』
『そうだな、偶然この用務員室に来た時に オルゴールを見つけてだな、過去の先輩達の話から
勇気を貰って、よし自分も やってやると考えた訳さ。』

『お、同じだ。』これは、運命かも。
『ほーっ、君にも 好きな子がいるのか？』

『まあ、一応。一方的に憧れてるだけですけどね。』

『なんだ、随分弱気だな。』

『はい、なにしろ相手は学年人気No1でして……』

『ぐわっは、ははは。言うと思ったぜ。』

『え、何で判ったんですか？』

『歴代の先輩達と同じだからさ。もう決まり文句だよ。そうやって、勝手に相手を高嶺の花にしておいて、自分が臆病なだけなのに、自分には釣り合わないとか言って、逃げる。』

『別に逃げてる訳じゃ……』

『いや、誰が見ても逃げてるね。大体その子自ら、No1を名乗ったのか？
人気投票でもしたか？噂でって言うが、何人の噂だ？』

『……』返す言葉も無い。

『そら見ろ。結局、その子のせいにして、自分の腰抜けさを、正当化しているだけじゃなか、弱虫君！』

『言いたい事、言ってくれるね。』ムカムカ。

『だって、そうだろう。君は自分では慎重派のつもりだろうが、
単に失敗を恐れているだけの坊やにしか見えないよ。
そんな弱虫じゃ、将来何もできない寂しい大人になるよ。』

『くっ、大きなお世話ですよ。失礼します。』我慢できずに用務員室を出る。

『毎回恒例のワンパターンだな、しかし。そうなると、1時間もしない内に帰ってくるはず……。
さて、木工細工の準備をしておくか。』

校内自販機のアイスコーヒーを飲みながら、頭を冷やす。悔しいが、あのオヤジの言う事は正論だ。
このモヤモヤした気分を払拭するには、たって砕けるしかないか。そうなれば、スッキリするかも。

コーヒーを飲み終える頃、部活休憩中の中本がやってきた。

『よう、石上。夏休みなのに、登校してどうした？部活でも始めたか？』

『いや、ちょっとな。それより中本、失恋すると本当にスッキリするか？』

『へ？いきなり何だ？さては、お前……』

『どうなんだよ？』

『ああ、スッキリするさ。失恋のショックはデカいが、モヤモヤは晴れる。

モヤモヤした気持ちをずっと背負ってるなんて、俺には無理だね。』

『そうか、サンキュー。胸に刻んどくぜ。』俺は、猛烈に燃えてきた。

『キャー！今日の石上君、素敵！！』

『ケンカ売ってんのか、この野郎！』

中本に一発蹴りを入れた俺は、用務員室に向かって全力疾走した。

決めた。やってやる。絶対に告白する。そして、気持ちよく振られて、スッキリするんだ。

こんな苦しみ、もう沢山だ。開花、覚悟しとけよ。(人とは少し違う意思での決断だった。)

用務員室

『用務員さん、先程は すみませんでした。』

『おう、早かったな。ん、どうした？シャツに足跡が付いてるぞ。』

『ああ、これね。さっきサッカー少年に襲われて、でも大丈夫です。平気です。』

『そうか、で、やるのか？』じーっと見つめてくる。

『はい、やります。やらせて下さい。』見つめ返す。やはり、ごつい顔だ。

『絶対に途中で辞めないか？ちゃんと告白できるか？』しつこいオヤジだ。

『もちろんです。誓います。』

『よし、では今から アタックプロジェクトを 始動する。君は アタッカーNo.18だ。』

『は？アタックプロジェクト？アタッカー？』

『いかにも、今は知らんが、昔は告白することを アタックすると言ったんだ。

だから君は、本プロジェクトの 第18代目の アタッカー って訳だ。』

『過去に17人も 先輩がいたんですか？』

『おう、過去17人の 勇者がいた。』

『結構、歴史があるんですね？懲りないとか、おせっかい といつか。』

『何か言ったか？ なんなら 止めとくか？』

『いえ、ぜひ 挑戦させて下さい。』

『材料は ここに用意してある。図面はコレ。判らない時は 聞いてくれ。』

『用意周到ですね。』

『まあな、君のような 腰抜けが 後を絶たなくてな。』

『大丈夫です。俺が プロジェクトの歴史を 変えて見せます。』

『うむ、健闘を祈るぞ No.18。』

『……』あまり 嬉しくない 呼ばれ方だ。

入魂

高校生活 最初の夏休み、俺は偉大なる野望を 胸に抱いて決意した。
ハンドメイドの 木製オルゴールを自作し、クラスメイトの 開花に贈り、告白する。
そして、一瞬で 一刀両断にされ、この心のモヤモヤが 消滅する。

完璧なプランだ。後は、魂を込めて オルゴールを 作るだけだ。頑張るぞ。
(熱い恋の想いとは異なり、何か 怨念のようなものが 込もりそうである。)

用務員さんの 作成した図面をよく見ると、ノコギリ、カンナ、やすり、ドリル等を使用するらしい。
家には、そんなもの 何一つ無い。そうなると、当然高校の工作室で作業する事になるのだが、
今は夏休み中で、工作室には しっかりと鍵が掛っている。
となると、やはり 用務員室の道具を借りるしかない。

----用務員室----

『よろしくお願ひします。』

『うむ、全て 予想通りだ。ここで 作業して構わないぞ。』

『見事な予想。そして 万全なサポートですね？』

『何しろ君で18回目だからな、この先 どの辺で 壁に当たるかも 想像つく。』

『頼りにしてます。用務員さん。』

『おう、なんなら 結末までの シナリオを 書いてやろうか？』

『いえ、それは遠慮しときます。』

根気の無い俺にしては、長続き していると思う。作り始めてからもう、2週間に及ぶ。
しかし、一向に完成しない。切るべき 個所を切らなかつたり、
寸法の測り違いで、組み合わなかつたりと、失敗ばかりを 繰り返している。
もう、いい加減に うんざりだ。

『やはり、ここの 壁に当たったな。』したり顔が気味悪い。

『少し 進んでは 失敗で、一から やり直し。これの 繰り返しですよ。なかなか 完成しない。
一体 いつ完成するのやら。』

『こういう作業は 初めてだろう？当然だ。先輩達も そうだったし、人生も そんなものだぞ。
恋愛だって そうだ。』

そう言って、アイスコーヒーを 差し出してくれた。

『ありがとうございます。』コーヒーを飲んで一息付こう。

『一度で 成功するケースは……』

『そりゃ、単なる 偶然だよ。それか 天才だね。普通の人には皆、失敗から 学ぶもんだ。
何が原因で失敗したか、どうすれば 同じ失敗をしないか、学習していく。そうやって 成長していくんだ。
大人になっても、これの 繰り返しだよ。』

『結構、大変ですね。大人になるのは。』

『だろう？甘い考えは 通用しないぞ！』 満面の笑みになる。

『覚悟しておきます。』

8月が 残り1週間になり、オルゴールも 組み立てが完成した。

-----用務員室-----

『うん。良い出来だ。』 ごつい顔の笑顔が怪しい。

『そうですか？頑張りましたからね。ありがとうございます。』 気分爽快。

『で、曲はもう決まったのか？』

『えっ、曲？何の曲ですか？』

『つまらんジョークだな。お約束か？』 引き攣った笑いに変わる。

『いえ、ですから……僕の好きな曲ですか？』

『き、君の好きな曲でも 構わんが、彼女に 贈るんだから 彼女の好きな曲が 良いんじゃないの？

知らないなら 聞けば 済むだろう。』 眉間のシワがグロテスクだ。

『彼女の好きな曲を聞いて、どうしろと……』

『真剣に判らんのか？オルゴールに 乗せる曲だよ。曲が 流れないと タダの 置き物じゃないか。

それとも、オルゴールではなく 木工作品として 贈る気か？』

『いえ、曲の事を すっかり忘れていました。』

『君、本当に アタックする気が……』

『ありますよ！かなり。』

『……ここで 躓くとは、予想外だ。』

呆れた顔も やっぱり ごつい。

切り札

オルゴールにとって 曲は心臓部。これがどんな曲かで 全てが決まる。
素人の ハンドメイドなので、外観と音質は重視せずに、曲で勝負することになった。

問題は どの曲にするかだ。不幸にも 今は夏休み中。
開花に聞きたくても 会えないし、連絡先も判らない。大ピンチ。

む、待てよ。確か、夏休みが 終わる 2、3 日前に 登校日があった。
ちょうど 明日だ。明日、学校で聞いてみよう。

-----登校日 教室-----

岡 『うおっす、諸君。元気そうだな。』

植部 『久しぶりっこ。岡、随分 日焼けしたねー。』

開花 『ほんと、バスケ部なのに。さては 練習もロクにしないで 遊んでたな！』

岡 『失敬な！みっちり 部活で鍛えたわい。夏休み中の通学で 日焼けしたんだよ。』

石上 『ナルホド。開花も通学焼けか？』

開花 『しげしげと 見ないでよー。』

植部 『石上も結構、焼けてるじゃん。』

開花 『ほんと、部活無しの 石上が通学焼けな訳ない。遊び倒したと 見たね。』

岡 『本当か？オタクの石上？いつの間に そんなアクティブボーイになった？』

石上 『誰がオタクやねん！』

植部 『ところで、岡、そんなに 頑張ったんだから、秋には レギュラー取れそうだね？』

岡 『もちろん、狙ってるさ。多分、いや絶対 取ってやるぜ。』

開花 『やるじゃん、岡。』

石上 『開花もレギュラー取るんだろ？』

開花 『あたり前よ！その為に 頑張ってるんだから。』

岡 『オタクレギュラーの石上は、夏休み中 何やってたんだ？』

石上 『ふっ、人に言う程の事じゃないさ。』

植部 『人に言えないような事らしいわね。』

開花 『やばい、やばい。』

石上 『貴様ら……馬鹿にしがって。』

特に開花！今に見てろよ。見返してやるぜ。

岡 『で、結局 何やってたんだ？』

石上 『オル、いや、俺は ほとんど家で 音楽を聞いていたかな。』あ、あぶねえ。

植部 『へー、どんな曲？』

石上 『ドーザの 勝ってね とか……』

開花 『うわ、意外と まともじゃん。』

石上 『意外は余計だろ。開花は どんな曲聴くんだよ？』 ナイスなタイミングだ。

開花 『マンズの もっと強烈に君を抱きしめられたら かな。』

植部 『あー、あの曲 良いよね。しびれるなあ。』

岡 『お、感電したのか？』

植部、開花 『相変わらず、バッカじゃない？アンタ達！！』

石上 『俺もかよ！！』

岡 『そうだ。』

納得のいかない 不毛な会話だったが、

開花の お気に入りの曲を 知る事が出来たので

今日のミッションは 達成できた。まあ、良しとしておこう。

後は、その曲の オルゴールを買って、作品に搭載すれば 完成だ。

ゴールは近い。

決意

夏休み、御盆を除いてほとんど毎日 用務員室に通い、オルゴールの製作に挑んだ。
数えきれない失敗と やり直しを 繰り返した。
その甲斐あって、やっと、自分で納得のいく作品が完成した。

『おお、これは 素晴らしい。歴代アタッカーの中でも 屈指の完成度だよNo18。』
『えっ、本当ですか？やった。自信が出てきたな。』

『そうだろうな、コレに至るまでには 相当の苦難を 乗り越えないと無理だ。』
『いやー。また、大袈裟な。』

『うむ、今言った70%が ヨイショだ。同じ事を 毎回 言っている。』
『まじっすか！？』いい加減にしてくれ。

『ところで、No.18。』
『は、なんすか？ 改まって。』不機嫌。

『オルゴールも 完成したし、後は いつ プレゼントを 贈るかだな？』
『そうですね。』そーいや、考えてなかった。

『まさか とは思うが……』
『またあ、ちゃんと 考えてましたよ。』あぶねえ。

『いつだ？』
『クリスマスに……』

『4 カ月も先か！夏に作った プレゼントを 冬に贈るのか？』
『いや、ジョークですよ。決まっているでしょ！』ドキドキ

俺は悩んでいた。
『クリスマスまで 寝かしておく と オルゴールが腐る。』
という用務員さんの狂言は無視して、いつ 贈ろうか？

9月には、体育祭がある。『参加賞に どうぞ』というのは、情けない。
10月には、中間テストがある。『テスト よく頑張りました』では、イヤミになる。

11月は バレーボールの秋季大会が始まる。『レギュラー奪取祝い』
これだ！これが一番 気が利いている。
開花は絶対、レギュラー取れるはず。この時しかない。
しかし、11月も、12月も大して 変わらん。どうするか？

9月上旬。一学期の総決算、実力テストの真っ只中。
そんな朝、登校してすぐの俺に珍しく、植部が ひっそりと 小声で話し掛けてきた。

『石上、良い情報があるよ。』

『なんだよ、テスト問題を 事前に知ってるとか？』

『私にとっちゃ、そりゃ重要だけど、アンタには それ程 重要じゃないでしょ？』

『もっと 良い情報かよ、何、何？』

『あのね、明後日 (開花)陽子の誕生日なんだ。』

『……ふ～ん、で？』 おお、なんと素晴らしく グレイトな情報！！

『しらじらしい。隠すのが下手ね。相変わらず。』

『は？』 ドキドキ、ドキドキ。

『知ってるんだから、石上が(開花)陽子の事 好きなのを！』

『……』 ドキッ ドック、ドック、ドック……

『陽子だって、気付いてる みたいよ～。』

『何が 言いたい？』 キッと睨みつける。

『そんな 怖い顔 しなくても 良いでしょ。そんな 事だから、ボウヤって 言われるのよ。』

『……』 言い返したくても、言葉が見つからない。

『素直に ありがとうって 言えば 済む事じゃない。』

『アリガトウ』

『棒読みね。ぜんっぜん 気持ちが 込めて無い。』

『……本当に、ありがとう。いつか お礼をするよ。』

『うん、期待してるわ。』

俺が開花を好きだという情報が、どこからリークしたのか気になるが、リーク元については、考えない事にしよう。とにかく、プレゼントを渡すのは 明後日だ。幸い、プレゼントも完成し、後は 包装するだけ。楽勝だ。

明後日は、実力テストの最終日で11時には終了し、解散。植部の情報によると、12時頃から、開花の家で 女子だけのバースデーパーティーが 開催されるらしい。

そこへ 俺一人が乗り込む 勇気は無いので、チャンスは テスト終了から下校開始までの約30分間だけ。この30分の内に、開花を人気の無い場所へ連れ出し、5～10分間で勝負を掛ける。パーフェクトプランだ。

ところで、結果は どうなるだろう？ 予想通りOUTか、意外にもOKか。OUTの場合、パーティーで 極上の笑いネタにされる。マズイ。まさか、植部は初めから俺を 笑い者にする為に、罠を仕掛けて……いや、そんな ペテン師じゃないはず。

え～い、今更 何を弱気な！

そんな事も 覚悟して プロジェクトに 挑んだはず。しかし……

し、しまった。テスト中だった！あと5分しかない。

しかも、まだ半分も終わってない。く～、頑張れ。根性だ！集中！！

アタック

9月〇日 今日 愛する 開花陽子の16回目の誕生日。
思い起こせば、4月に知り合って 恋に落ち、
その後、夏休み前まで 確実に 二人の距離を詰めてきた。
夏休みでは、一心不乱に 想いを込めて オルゴールを作った。

相手は 学年人気No1 最高峰の花。
そして、ついに今日……どうしようかな、やっぱり止めとこうかな……

----- 朝、登校直後 テスト前 用務員室-----

『おはようございます。』

『うむ、おはようNo.18。 ついに来たな。ナニの日が。』

『はあ……』溜息をつく。

『さては、ここに来て 怖気づいたな？』

『そんなことは……ないです。』

『100% 怖気づいとる！！』

『今なら、まだ間に合う。止めたら どうだ？』

『えっ、嫌ですよ。そんな、せっかく 作ったのに。』

『なっさけねー。せっかく 作ったオルゴールが 勿体ないから、渡すのか？』

君の気持ちは 二の次か？本末転倒じゃねえか！

そんなんじゃ、受け取った彼女は ちっとも嬉しくないぞ。』

『……』

『いいかい ボウヤ。ある哲学者の話だ。やった後悔と やらなかつた後悔、』

どっちの ダメージが 大きいと思う？』

『どっちも 後悔するんですよね？う〜ん……』

『やった後悔はな、時間が経てば 傷はやがて治る。次回の ステップにもなる。』

しかし、やらなかつた後悔のダメージは 計り知れないぞ。得るものは何もない。

あの時 やっときゃ良かった を一生引きずる。それでも止めるか？』

『そうでした。モヤモヤを 払拭する為に、ここまで 頑張ってきたんです。』

『結果より 大事な事は……』

『勇気を出して チャレンジする事です！！』

『よし、もう 迷うなよNo.18。今日で 君の歴史が 変わるんだ。』

『おう。』

『相手の眼を見てビシッと決めてこい。結果を恐れるな！』

『おお！』

最後に用務員さんから魂を貰い、不安は消えた。

そして、実力テストの全てが終了し、時は来た。

植部も眼でエールをくれた。いいやつだ。もう恐れるものは何もない。

よし、いくぞ。

全てのテストが終了し、皆教室でワイワイと騒いでいる。

今こそ絶好のチャンス。俺は、開花にさりげなく近づき、声を掛けた。

『よう、開花、テスト どうだった？』

『まあまあかな。石上は？』

『完璧さ。』

『へー、やるじゃん。』

『ところで……』

『ん？なに？』

『少し、10分だけ、時間 貰えないか？』緊張した面持ち。

『……いいけど。』緊張が伝わってきた。

普段とはまったく違う緊迫した雰囲気。言葉も無く、二人きりの場所へやって来た。

二人の足が止まり、視線を合わすことなく、向き合う。

『わざわざ連れ出して、何の用？』開花は、下を向いたままだ。

『……』背水の陣だ。逃げ場は無いぞ、決めろ。自分に言い聞かせる。

『あ、あのな、実は……』声が震える。

『何よ、変なの。』クスッと笑う。

『俺が真剣に話そうとしてるんだから、茶化さず聞いてくれよ。』入魂！

『あ、……うん。判った。』

『今日、開花の誕生日だろ？』ガサゴソとプレゼントを鞆から取り出そうとする。

『えっ、何で知ってるの？』二人の視線がぶつかる。

『……俺、開花の事が好きだから。コレ渡そうと思って』プレゼントを差し出す。

『はっ？』

『開花さん、誕生日おめでとう。コレ、心を込めて作りました。受け取って下さい。』

『まっ、マジで？また、からかってるんじゃ……』

ドッキ、ドッキ、ドッキ、ドッキ

『俺の頭のとっぺんから、つま先まで、見てみろよ。それでも冗談に思えるか？』

『……』開花の瞳には、石上の真剣な眼差し、プレゼントを差し出した震える腕、

そして、ズボンの裾が小刻みに揺れているのが映った。

『あ、……ありがとう。』ゆっくりと プレゼントを受け取る。

『良かった。受け取ってくれて、嬉しいよ。』

『でも、私でっさり、石上は 私の事を 女と思ってないのかと……』

『そんな訳ないだろ！ 出逢った時から、……ずっと好きだよ。』

『……』 頬を真っ赤にして、下を向く。

『俺と、付き合っただけじゃないか？』

『……今すぐ、返事しないと ダメかな？』

『いや、今が無理なら また今度 聞かせて欲しい。』

『うん。近いうちに 返事する。』 そう言って、その場から離れようとする。

『判った。あ、ソレ 俺の魂が込められた ハンドメイドのオルゴールな。世界に たった1個しかないんだぜ。
家に帰ってから、聞いてくれ。』 見送りながら言う。

『へえ、そんな 趣味があったんだ？ どんな曲？』 立ち止まり、振り返る。

『それは、帰ってからの お楽しみ。』 ニヤケる。

『やな奴！！ バイバイ。』 満面の笑みを浮かべて そう言いながら走り去った。

その場に 一人残った俺は、両拳を突き上げ、心の中で絶叫した。

『やった。やったぞ！ 最高峰の花に 手が届いた。』

恋から恋愛へ

アタックを無事達成できた俺は、用務員室へと走った。
廊下を走るなど書かれた張り紙が 風圧でヒラヒラと舞う。
そして、ノックもせずに室内へ飛び込んだ。

『用務員さん！』

『うわっ！なんだ、No18か、驚かすな！！』

『やったよ、やったんだよ俺！！』興奮が収まらない。

『そ、そうか。渡せたか？』

『ああ、バッチリ受け取って貰えた。』

『肝心な事は……伝えたか？』

『もちろん、完璧に言えた。』

『そうか、でかした。で……』

『……で？』

『勿体ぶるなよ！こいつ！！ で、結果は??』

保留。後日 返事するらしい。』

『むむむ、相手はNo18より 2枚も3枚も上手だな。』

『何の話ですか？』

『その子の事だよ。その場で君を一刀両断にせず、数日間 期待させておいて、

後日 背後からいきなり君をバッサリと……

お、冗談！冗談じゃないか！！拳を下ろせ。校内暴力は ご法度だぞ！俺が悪かった。』

アタック達成の嬉しさに暴走した用務員さんは、
俺に謝罪し、カップ麺を御馳走してくれた。

『頂きます。ちょうどお昼ですね。』ズルズルと麺をすする。

『ああ、おかわりしても良いぞ。』

『ありがとうございます。』

『No18。ここからが、男としての真価が問われるぞ。』

割り箸を俺に向ける。

『ですよ。』

『仮にOK貰ったとしてだ、付き合いだして、君に 男の魅力が無いと判れば
その時点で LOVE IS OVER だ。』

『はい。覚悟できてます。』

『恋と恋愛は、まったく別物だからな。』

『えっ、そうなんですか？』

『おおよ。恋なんて、片思いも含まれるだろ？恋愛は二人で進めるもんだ。』

『ほうほう。』

『愛想を尽かされたくなかったら、男を磨いとけよ。』

『アタックプロジェクトの他に、交際プロジェクトなんて……』

『ねーよ！そんなもん！！』

用務員室で、随分と話し込んだ。時計は午後5時を過ぎていた。

開花のバースデーパーティーは終っただろうか？

未だ続いているだろうか？

『No18、落ち着かない様子だな？……無理もないか。』

『はい。また、緊張してきました。』

『そろそろ帰ったらどうだ？疲れただろ？』

『連絡を待ってるんです。』

『彼女からの？』

『はい。プレゼントに手紙を入れときました。俺の携帯番号とメルアドも書いて。』

『へ～、やるじゃねえか。』

『まだ、連絡ないです。』

『今、パーティーの途中だろ。まだ、プレゼントを開けてないんだよ、きっと。』

『何を迷っているんだろう？それとも迷惑だったのかな？』

『また、悩みだしたな？そういう悩みは止せ。考えたってどうしようもない。』

『……』

『大体だな、もう恋の矢は放たれたんだよ。今の君には、どうする事も出来ないさ。
後は、矢が彼女の胸に命中するのを祈るだけだ。違うか？』

『おっしゃる通り！返事が来るまで、忘れます。』

『それがいい。テストも終わったし、何もかも忘れてしばらくの間 遊びに行けば良い。』

『そうですね。今日はもう帰ります。お世話になりました。』

『おう、返事が来たら、聞かせてくれ。』

『はい、じゃ失礼しま……』 その時だった

『うわっ』 ブーン、ブーン、ブーン……胸ポケットの携帯バイブが暴れだした。

『ど、どうした??発作か?』

『電話だ。知らない番号から……』 ブーン、ブーン……『もしかして 開花?』

『出る！出る！すぐ出る！！』

『は、はい、石上です……』 電話の相手は開花だった。

『うん。……それでいい。…』

二人にとって初めての電話は、一分にも満たない短い会話だった。

ただ、用件を伝えただけで、他には話せなかった。

『……どう だった?……』 緊張でごつい顔が固まっている。

『……はい、おかげさまで、ボーイフレンドから始めようって……』

『そうか、……そうか、やったな遂に。クラスメイトからボーイフレンドに昇格だ。

やったぞ！！プロジェクト史上 初のアタック成功だ！ライバル達に勝ったんだ。』

まるで、自分の事のように はしゃぐ中年オヤジは少年のような笑顔を見せて喜んだ。

『はい、最高峰の花をゲットしました。』

お互い、両手で ガッチリと 握手を交わし、用務員さんは、涙を浮かべて こう言った。

『アタッカーNo18。本プロジェクトのミッションは完了した。これにより、本プロジェクトを解散する。』

石上君、あおめでとう！！ 』

『ありがとうございました！』

恋する意識の差

難攻不落の城が遂に落ちた。小人が巨人を倒した。

天使の戸惑い。女心と秋の空。……

などなど、噂は当事者の了承も得ず、好き勝手に飛び交う。

とても、とても、白馬に乗った王子が姫を迎えに来た

などとは言ってくれない。

現実は、どうして こうも残酷なのだろうか？？

----アタックから1カ月後の朝 教室----

『石上い、貴様、何か重要な事を隠してないか？』ワナワナ。

『うっ、その、岡が言いたいことは大体想像付くけど、その……個人情報だから……』

『そ〜かい、そうなのか？俺は貴様の恋を笑ったか？馬鹿にしたか？』

『お、岡くん！実は君に報告したい事があるんだ！！親友として。』

『だろうな。良からう、言いたまえ。』

『あのな、実は、先月、告白を……してだな……』

『で？……』獣のような眼で俺を睨みつける。

『で、その、一時保留にされたんだけど、友達から始めようって事で……』

『ほ〜、それだけか？一部の情報筋によると、石上と開花は……

恋人として付き合っていると報道されているぞ！！』

『なに〜？』それが事実なら嬉しいけど！！

『この期に及んで、まだシラを切るか？』

石上 『だから、まずは、ボーイフレンドとガールフレンドとして……』

植部 『じゃ、今までは何だって言うのよ？』

石上 『そりゃ、きみい、クラスメイトとして……』

開花 『そうやって、動揺するところが、

いかにも嘘っぽいよねえ……』

石上 『当の本人が、よくそんな事言えるな！？』は、恥ずかしい！

恋の噂が飛び交う中、普段通りのバカな会話があった。
周囲に悟られないような仲間の配慮だろうか？
それとも単純に話のネタにされたのかは不明だが、
正直 仲間からの祝福は嬉しかった。

生まれて初めて好きになった人が、恋人になりつつある。

放課後 体育館 女子バレー部

キャプテン 『みんな 集合！！』
部員達 『ハイ！』

キャプテン 『これより、監督から 来月の秋季大会出場メンバーを発表して頂く。』
監督 『うむ。では、発表する。まず、第一回戦のスターティングメンバーは、
香月、上本、岸、森口、名村、開花で行く。異論は無いか？』
一同 『…… ありません！』

キャプテン 『満場一致という事で、初戦はこのオーダーで戦う。
勿論、不備な点が見つければ、都度修正していくので、気を緩めないように！』
一同 『ハイ！』

キャプテン 『特に開花。一年でレギュラー、いきなりスタメンだ覚悟はいいな？』
開花 『ハイ！どんなボールにも食らい付きます！！』

監督 『皆、よく聞いてくれ。今回、開花をスタメンに起用した理由は二つある。
一番目は情熱だ。待っていれば、いつか自分の番が来るのではなく、
欲しいポジションは、自分の力でライバルから奪うのだ！

二番目は、他の選手を見る 広い視野だ。他の選手の欠点を 探るのではなく、
選手個人の個性を見極める力がある。開花は、近い将来 チームの要となるだろう。
つまり、来年、さ来年を睨んだ起用とも考えている。異議の有る者はいるか？』

一同 『 ありません。 』

キャプテン 『では、今日の練習はこれまで！』

一同 『ありがとうございました。』

レギュラー発表後、一年生の輪の中心に 開花が居た。

自分たちが出来ないことを、唯一 開花一人が やってのけたのだ。皆 開花を祝福している。

開花 『皆、ありがとう。精一杯 頑張るよ。』

その反面、レギュラーを奪われた 昨日までのレギュラーが居た。

その選手は、一人涙を流し、他人の慰めは一切受け付けなかった。

ただ一人、厳しい現実に 打ち勝とうとしていた。

開花は、心の中で強く誓った。

(先輩から奪ったスタメンコートは、絶対に譲らない。

引退するまで、私のポジションは 死守して見せる。)

高校生活のほとんどを バレーボールに 費やすつもりであった。

恋しくて

情熱的な告白、劇的な恋愛とまでは行かないまでも、それなりに二人の関係は続いていた。教室では、今まで通りに振る舞い、互いに名字を呼び捨てで呼び合っているが、二人になると、名前を呼び捨てで呼び合うようになった。

-----ある夜の電話での会話-----

(開花)陽子『ねえ、勇氣、聞いてよ!』

(石上)勇氣『どうした?ご機嫌 斜めだな。』

『今日ね、練習が終わってから私一人先輩に呼び出されて、すごく苛められたの。』

『なに!それはひでえな。かわいそうに。』

『でしょ!もう、腹がたつ。信じらんない。』

『先輩達は余程、陽子が妬ましいんだな。』

『えっ?何で?』

『前に聞いた事があるんだけど、女子の部活って、先輩は可愛い後輩を絶対苛めるとか。

自分より可愛いのが許せないらしい。それで、可愛い陽子がターゲットにされたって訳だ。』

『……』

『ん、どうした?』反応が無い。怒ったのか?

『ねえ~、ゆうきい。お願い、もう一回言って!!』

い、色っぽい。『かくかくしかじか。』

『何それ!ケチねえ。いいじゃん、別に減るもんじゃないし、

お金が掛る訳でも無いでしょ。ホラ、早く、言いなさいよ!』

『落ち込んでるか弱い彼女の為に言ったつもりなんだが……』

『あ、そーですか。どーせ私は強い女ですよ。』

『やっと、元気な陽子が帰って来たな。』

『……まったく、勇氣、どこでそんな女の扱いを覚えた訳?』

『秘密、蜂蜜。』

『くだらない！』

『なあ、陽子。 今度いつ会える？』

『えっ？う～ん、今部活 忙しいし、せっかく取ったレギュラーだし、練習サボるとすぐ取られちゃうんだよね。どうしようかな……』

『俺達、まだ一度もデートしてないな？』

『あ～、ゴメン。そこは反省してるって。でも、会いたい気持ちは有るんだからね！』

『それを聞いて安心したよ。少しだけ。』

『会うの……秋季大会が終わってからじゃダメかな？』

『……厳しいな。仕方ない、待つよ。でも、大会には応援に行ってもいいか？』

『ダメダメ、絶対ダメ！！』

『何で？頑張ってる 陽子の姿を……』

『だから、ダメだって！！』

『理由を 教えてくれよ。』

『バレーボールをやってる時は、私 女を捨ててるから……』

だから、勇気にだけは 見られたくないんだ……』

『そおお？うん、それなら いいや。』でれ～っと鼻の下を伸ばす。

『ほんと、ゴメン。』

『うん、いいよ。お休み。』

『お休み。』

オフタイムは恋のオンタイム

秋季大会が終り、熱血バレーボール少女も小休止する時が来た。

クラスメイトでもあるので毎日顔を合わせていたし、電話やメールもよく交わしていたが、告白してボーイフレンドOKの返事を貰ってから2カ月、ようやく初デートになった。

『あ～あ、負けちゃった。あと一步で県大会出場だったのに。』

『おめでとう。そして、おかえり。やっと、僕の元に帰ってきてくれたね。』

『あの場面では、絶対カットサーブなのよ。でも、裏をかいて……』

『仕方ないさ、相手が一枚上手だったんだ。』

『私がもう少し、反応良くダイブできていれば……』

『忘れろよ、もう、それより今日を楽しもう……』

『でも、最後までコートを守ったから……』

『おいおい、いい加減にしてくれよ……』

『何落ち込んでるの？』

『その、何だ、デートの認識が無いのかよ？お嬢さん！』

『冗談でしょ。ユーモアが判んないのね。』

『これじゃあ、教室に居ると変わらないじゃんか。』

『あ～そ、判ったわよ。これで、よくって？ダーリン。』

とって腕を組んでくる。

『……ううっ……』き、気持ちいい。

『あら、ボウヤ。今のは刺激が強すぎたかしら……』

『…いきなり、それは…反則だろ。』けど、嬉しい。

『で、勇気、今日はどうするの？』

『初デートの基本は、ズバリ恋愛映画！』

『おお、出ましたねえ。』

『そうとも、照れくさい恋愛映画でも観て、歯の浮くようなセリフを学習するのさ。』

『学習した成果をちゃんと活かしてくれるんだよね？』

『うん。退路を断ち、不退転の決意で、前向きに挑む所存であります。』

『何が言いたいのよ。さっぱり判んない。』

二人共、恋愛映画を観るのは初めてだった。

恋愛TVドラマ、小説、漫画、噂話にも今まで興味がなかった。

二人が付き合いだしてから共に関心が湧いて来たのだ。

映画の後、食事をしながらの会話が弾む。

『いや～、刺激的だったね。』

『うん。知らない世界を知ってしまった。』

『なんたって、彼氏役が超イケメンだったよね。あ～、憧れるな。』

『う、でも、ヒロインの北尾キーちゃんには、あんな奴より俺の方が似合ってるよ。』

『あー、そうですかっ！！』

『こ、怖っ。』

店を出た二人は、どちらから誘う訳でなく、ごく自然に手をつなぎ、並木道を歩いた。

そして、噴水の有る公園に着くと、二人は肩を寄せ合うようにベンチに座った。

『やっぱり、出逢いは偶然じゃなく、必然だよな。』

『……そうだな。』

『どうしたの？急に物思いに老けこんで？』

『あることを思い出したんだ。』

『あること？まさか、前の恋を……』

『今が初恋なんだから、前なんて無いんだよ！』ドキ、ドキ、

『なら、よろしい。』赤く染めた頬がかわいい。

『用務員さんとの出逢いを思い出したんだ。』

『ええっ、！ああいう中年オヤジが趣味だったの？』

『ちがーう！！真面目に聞け。』

『ゴメン、それで？……』

『実はな……』

俺は、用務員さんと偶然 出逢った時の事から、勇敢な先輩達の歴史、俺の努力、そして、くじけそうな時は用務員さんに 支えられた事も、アタックプロジェクトの話を 包み隠さず 正直に 打ち明けた。

『……そんなドラマがあったんだ。……私なんかの為に……』

『陽子なんかの為じゃなく、陽子の為だけに……これこそ 運命だよ。』

『私、そんな……どうすれば……』

『あ、あの時のオルゴール……』

『もちろん、大事に持ってるよ。落ち込んだ時でも、あの曲を聴けば復活できる。』

『そ、そうか 安心したよ。もしかして、捨てられたらなんて……』

『捨てる訳 無いじゃん！』

『よかった。』

『あのね、正直に言うと。プレゼントを貰った時、どう 断ろうかって考えてた。』

『……』 やっぱり！！

『あの日、パーティーの後、一人になった時に あの箱を開けたの。』

そしたら、あの手紙とオルゴールがあった。

手紙の文章は単純で小学生みたいって思ったけど、

オルゴールの曲を聴きながら読み返すと、嬉しくて涙が止まらなかった。』

『……』 おお、あぶねえ。用務員さん、サンキュウ。

『だから、勇気をOKしたんだよ。』

『ありがとう。嬉しいよ。』

『私を好きになった理由を教えてください？』

『始めて君を意識したのは、入学二日目の食堂だ。愚痴を零しながら 昼食をとる仲間の中で、君だけが前向きな考えを持っていた。そして、絶えず 夢に向かって努力する姿に 憧れたんだ。』

それに何より、辛くても 凹まない 明るい笑顔が 忘れられなかった。

クラスメイト なんだから、何も 努力しなくても 楽しく会話ができる。

でも、それだけじゃ 物足りなくなっていた。

その時、俺は……君の事が好きだと気付いたんだ。』

『へへ。照れるな。』 そう言って下を向く仕草が、また可愛い。

秋風が少し冷たく感じる夕暮れ時、二人の会話が途切れる度に、噴水の音が耳に入る。そして、しばらくの間 会話が途切れたままになっていたが、陽子が沈黙を破った。

『勇氣は、他の男子と違って、ちゃんと私を見てくれてた。
外見だけじゃなく、性格や生き方までも……それが嬉しいよ。
だから、遅くなったけど、真剣に付き合いたいなって。』

『よ、陽子……好きだよ。』 陽子の肩を抱き寄せ、顔を近づける。

『…私も…好きだよ。』

見つめ合う二人の顔が接近する。

『あの……』

『何？……』

『こういう場合、さっきの映画じゃヒロインは目を瞑ってたけど……』

『あ、そうだった。……』と云って 目を閉じた。

そうして二つの震える唇は、ほんの少しの時間だけ重なった。……
二人にとって 初めての出来事でした。

それぞれの夢

秋から冬になり、12月の 期末テストを終えると、いよいよ クリスマス。
クラスの グループで クリスマスパティーを開くことになった。

一同 『メリー クリスマス！！』
それぞれのグラスが合わさり、音を立てる。

岡 『おお、このチキン旨そう。一番乗り！』と早速 箸を出す。

開花 『手が早いよね、食べ物には。』
植部 『ほんとよね、女には 奥手だけど……』

岡 『ぐむっ、……』喉を詰まらせる。
石上 『ははは、ズバリ 言われてら！』場内大爆笑。

岡 『……はあ、君達、人が 食事してる時に 随分じゃないか。』
石上 『しかし、周知の事実だ。』
開花 『今の話を疑う人は、岡を知らない人だけね。』

岡 『てめえら、それだけ言って 覚悟は できてるんだらうな？』
と石上を睨む。
石上 『……』ドキッ

岡 『ところで、石上君 最近 彼女とは 旨くいってるかね？』
にた〜っと笑う。
石上 『まあ、ポチポチかな……』うわ、来た。

植部 『彼氏は こう言ってますが 実の処 どうなんですか？開花さん！』
開花 『アンタは 芸能レポーターか！』

岡 『石上 男らしく 全てを語れ！楽になるぞ。』
植部 『プロポーズの言葉は？指輪は もう貰いましたか？結婚はいつ？赤ちゃんは……』

開花、石上 『あ〜、うるさい！！』 『いい加減にしてくれ。』
岡 『それは 無理だと言ったろ。思春期の盛りに 他人の恋路が 一番の関心事なんだ。』

開花 『ほ～、そんなに 関心があるのに、なぜ岡は 硬派を気取るの？』

岡 『うっ、……』 いいぞ、逆転した。

植部 『硬派とか言っ、実は 単に 恥ずかしい だけじゃないのお？』

岡 『……』 耳が 真っ赤になる。

石上 『おおっと、岡選手、コーナーに 追い詰められた。これは、ピンチです。』

岡 『……俺には 夢があるんだよ。絶対 叶えたい夢が。だから、恋をしている暇はない。』

開花 『恋をした方が 力が湧いて、より良い結果が 出せるかもしれないよ。』

岡 『そ、そうなのか？』

開花 『うん。辛い時なんか、すごく 助けられるし、

一人じゃないって 思うと……ちょっと、何を 言わせるのよ！』

真っ赤な顔で バシッと 隣の石上を 叩く。

石上 『痛えな！ なんだよ！ 良い話なのに 誤魔化すなって。』

ドッキ、ドッキ、ドッキ。

植部 『あ～あ、見てらんないわ、実際。ムカツク！』

開花 『何も、ベツタリ 付き合わなくても、お互いの 悩みを 打ち明けたり、
将来の夢を 語り合ったりするだけでも、互いの 力になると思うけど。
そう、支え合うのよ。』

石上 『……』 俺は、ベツタリ 付き合いたいけど。

岡 『俺には、プラトニックな恋は無理だ。』

植部 『何で？』

岡 『俺、付き合いだしたら、きっと 何もかも 手に付かなくなる。

バスケ中も 彼女の事を 考えて、それで 何もかも 失うと思う。』

開花 『岡の性格上、なんとなく 判るけど、全てを 失うのは、言いすぎじゃ……』

石上 『あの、恋の価値観に 花が咲いているようだが、

それぞれ 将来の夢を 一人ずつ 語るってのは どうだろう？』

一同 『賛成』 『異議なし。』 『お互い 茶化すのは 無しな。』

岡 『じゃ、まず俺から。俺の夢は 生涯バスケットボールで 食っていく事。

まずは、インターハイ 出場で 名前を売る。

そして、特別推薦で 大学に進学し、ここでも 大活躍。

何かタイトルを取って見せる。大学卒業後は、実業団入りだ。

ここで さんざん 活躍した後、引退。その後は、高校か大学で バスケ部の監督をする。結構、無理があるが、不可能とは思いたくない。

夢も希望も 無くしたら、頑張れないもんな。』

一同 全員で拍手。『おお〜。』

開花 『私の夢は高校の体育教師になる事。大学の教育学部で教師を目指しながら、バレーボールをやる。そして、卒業後は 教師と女子バレー部の監督ね。結婚しても、この仕事は 続けたいと思ってる。絶対 叶えるからね。』

一同 全員で拍手。『すげえ。』

植部 『えっと、私は、未来の旦那と 喫茶店経営すること。店は、若いカップルが 絶え間なく 出入りできるような店にしたい。その店に来ると 必ず将来 結ばれるなんて 噂が立つような店がいい。未だ、彼氏は 居ないけど、いつかきっと 現れると 信じてる。それまでは、喫茶店で 働きながら、未来の自分の店を 想い描くの。』

一同 全員で拍手。『やるう。』

石上 『俺は、大学で 心理学を学び、将来 カウンセラーになりたい。世の中、ちっぽけな事で悩み、苦しんでいる人が 沢山いる。他人から見れば 些細な事でも 本人にとっては 重要な事だ。そんな悩みを持っている人の 背中を押す事ができれば、その人の 悩みが 晴れるよう 役立つなら、そう思い この道を目指した。この道を選んだ理由は、迷っている 自分が居たから。弱い自分の 背中を 押して貰えたお陰で 勇気が湧いた。だから、自分も 誰かの 役に立って、その人が 勇気を出せるよう 力になりたいと思う。』

一同 全員で拍手。『……』あまり、反応なしか。

それぞれの夢を語り終えた処で、皆 互いの前途を祈り パーティーは解散となった。夜も遅いので、俺は(開花)陽子を家の近くまで送っていく。

『意外だな。勇気が カウンセラー志望なんて。てっきり、音楽業界に 進みたいって 言うと思った。』

『ちょっと 前までは、そうだったよ。』

『あ、判った。用務員さんの 影響だ。』

『うん。正解。用務員さんは、なぜかアタックプロジェクトをお忍びでやってるけど、俺は、もっと視野を広げて堂々とやりたいんだ。』

『高校生だけじゃなく、老若男女が対象ってわけね？』

『その通り。難しいと思うけど、頑張るよ。』

『うん、応援する。』

陽子の家の近所まで来て、道端に伸びた二つの影は一つに重なり、また二つに戻った。

風向き

勇気と陽子の恋は順調だった。自他とも公認でコソコソせず、堂々と振る舞った。その甲斐あってか、もう二人をからかう人間は居なくなった。

季節は冬から春になり、二年生に進級した。一年生の時仲が良かった仲間たちは、見事にバラバラになった。

二年生にもなると、部活にも一層熱が入り、レギュラーを取った者は、他人に渡すまいと必死に守ろうとする。どこの部も同じだった。また、大会、強化合宿、テスト、と自由に使える時間は限られてくる。

陽子とは、メールを毎日交わすが、会うのは月に一回程度だ。クラスも別れたので、顔を合わす日が極端に減った。話す内容も、部活や将来の事が中心で、甘い会話はほとんど無い。

季節が夏に移った頃、男子バレー部の本岸から妙な噂を耳にした。

『石上、お前、開花とはまだ付き合ってるんだよな？』
『へっ？随分意味深な聞き方するじゃんか。何だよ？』

『いや、春季大会の時に、開花は別の高校のエースアタッカーから告白されて……』
『なにい！本当か？』

『うっ、知らなかったのかよ。相手は、D高校の3年で、バレー部キャプテン、ファンクラブができる程の超イケメンで……』
『もういい……』 ダメだ。月とスッポン、勝負にならねえ。

最近、(開花)陽子と会う日が減ってるし、電話、メールの回数も激減。大体告白されたなんて初耳だ。これは、やばいかも。

慌てて、夜電話をしてみたが、陽子はすぐに切ろうとする。告白された事を尋ねると驚いていた。

電話じゃなんだから、明日学校で会う事にした。
恋の風向きは、本当の季節とは逆に 夏の南風から冬の北風に変わっていった。

突然

7月のある日、俺は陽子と学校で待ち合わせた。
去年俺が陽子に告白をした場所で。

『昨日はゴメン。』

『あ、良いよ。電話じゃ話しにくいんだろ？ で……話って？』

『私が春に、告白された事 誰から聞いたの？』

『男子バレー部の ある人物から。』

『そっか、じゃ、もう限界かな？』

『????まさか、とは思うけど』 心臓バクバクバク

『うん。私、その先輩が好きに……なったの。』

『……嘘だ。……』

『本当。』

『俺が嫌いになったのか？』

『違う、そうじゃない。』

『じゃ、何で。』

『勇気は最高だった。本当に好きだった。でも、先輩が現れてから、全てが変わったの。』

『……そ、そんなこと……』

『ゴメン、本当にゴメン。』

そう言って、俺に抱きついてきたと思うと、頬にキスをして、去って行った。
俺の頬は、陽子の涙で湿っていた。

そして、陽子は、二度と俺のアプローチに応じる事は無かった。
俺は、陽子にとって 恋人から 同じ高校の人へ急降下していった。

自立

彼女に振られた。大失恋だ。原因は俺にある。男としての魅力が欠けていたんだ。何てことはない。

彼女は俺を魅力に感じたんじゃなく、自分の好きな曲が流れるオルゴールに一瞬心が揺れただけだったんだ。

それを贈った奴と付き合ったという訳か。バカだった。

自分の身の程も考えず、舞い上がっていた。

結局あのオルゴールが無けりゃ、俺には何の魅力も無いってことか…

-----放課後 用務員室-----

『よーむいん さーん…』

『何だよ。石上君か、やだね、その力の無さ。まるで、彼女に振られたみたいだな。』

『やはり、わかります？』

『ええっ？』

『はい、他に好きな男ができたとかで、LOVE IS OVERでした。』

『くーっ、そうか、辛いな！判るぞ、君の痛みが。』

がっくりと肩を落とす。

『まあ、アイスコーヒーでも飲めや。』

『ありがとうございます。』

『残念だったな。』

『はい、せっかく、用務員さんが応援してくれたのに、俺に魅力が無いばかりに』

『そういう考え方は止せて言ったろ！』

『せっかく、プロジェクト初のOKだったのに、また失恋記録更新ですね。』

『いや、実は初じゃねえ。二回目だ。しかも、ほとんど同じケースだ。』

『えっ？』

『実はなあ、初代アタッカーは、一旦OK貰ってたんだ。』

数か月 付き合っ、振られた。理由は、想像付くな？』

『はい、俺と同じですね？』

『……』

『その初代アタッカーって、もしかして……』

『そうだ、25年前の俺だよ。いやー、本当にバカだったよ。

オルゴール製作に情熱を注いだのは良いが、後の事を考えてなかった。

つまり、オルゴールを贈った時が最高点で、その日以降、魅力は低下し続け、ある日、退屈な奴ねって言われて、OVERさ。

今回のように、彼女に好きな人ができた訳でもないのに、まったく情けねえよ。』

『そんな事、ないです。』

『ほお、慰めてくれるのかい？』

『別に そんなつもりじゃ……』

『世の中にはな、腰抜けを見ると背中を押したくなるタイプと、

意地悪したくなるタイプがあるんだ。俺や石上君は前者だ。

黙って見てられないんだよ。』

『はい、同感です。』

『で、その初代アタッカーは、用務員になった時、腰抜け生徒を見て手を貸した。

それがアタックプロジェクトの始まりだ。』

『あの、用務員さん。こんな結果になったけど、俺、後悔してません。

どうか、プロジェクトを辞めないで下さい。出来る限り 続けて下さい。

俺の他にも 背中を押しして欲しがっている 生徒がたくさんいると思います。』

『ああ、判ったよ。』

『いろいろ、ありがとうございました。』

『ああ、しばらくは辛いけど、君ならいつか次の恋が出来るよ。』

『できますかね？』

『できるさ。間違い無く。』

『何で判るんですか？』

『ほんの少しだが、君は もう恋の味を知ってしまったら？ だからだ。』

『……キザですね～。全然 似合いませんよ。今の言葉。』

『ぐわっははは、…』

『用務員さん、俺、将来、心理学を勉強してカウンセラーになります。』

『そうか、そりゃ立派な夢だな。』

『俺もそうでしたけど、世間には精神的に弱い人が一杯居る。

その人たちの力になりたいんです。』

『石上君、随分たくましくなったな。去年とは見違える程だよ。』

『はい、自分でも何か自信が付いてきました。』

『いいかい、人生は 生放送みたいなモンだ。録画や再生、早送り、巻き戻しなんて出来ない。

あるのは、今だけだ。過去を振り返らず、明日を夢見ろ。』

『はい、覚えておきます。』

『用務員さん、俺、もうそろそろ、用務員さんから卒業します。

いつまでも甘えてたら、成長できない事に気付きました。だから……』

『ああ、判ってるよ。その方がいい。本プロジェクトはNo18を誇りに思うぞ。』

『ありがとうございました。』

それからの俺は 用務員室に行く事は無かった。

自分で考え、悩み、行動することに決めた。

もう、結果を恐れたりしない。もう、腰抜けじゃない。

自分の未来は、自分で切り開いて行くんだ。

END